

重要伝統的建造物群保存地区

く今なお息づく歴史と町並みく

二大祭りと観光のまち「足助」

豊田市立童子山小学校長 野田 靖

足助の由来と塩の道

足助の地名の由来は定かではない。源頼朝が伊豆で兵を挙げた頃、御家人として仕えていた浦野氏が、1177年に足助・中馬としてこの地に來住し、足助氏と称するようになったのが始まりとされている。元弘元年(1331)、後醍醐天皇による討幕計画「元弘の変」で、京都の笠置山に逃れた天皇に、最初に馳せ参じたのが、足助氏七代目の足助次郎重範である。このいきさつは、「太平記」にも記載されている。

足助は読んで字のごとく「足」を「助」けるところ。中馬街道(塩の道)の中継地点として古くから栄えてきた商家町である。「中馬」の語源は、信州の言葉で「中継馬」がなまったと言われている。中馬街道は、信州飯田

を出発点として、根羽で二つに分かれる。一つは足助を経て名古屋に至る飯田街道と足助の追分から岡崎へ至る足助街道である。もう一つは、根羽から新城を経て豊橋に至る伊奈街道である。

中馬街道で運搬された物資は、煙草、木地、柿、紙、塩、茶、綿など。最も重要な荷物は塩だった。足助に運び込まれる塩は、目方も品質もまちまちであったため、1俵を7貫目(約26キロ)に詰め直した。これを「足助直し」と呼び、飯田では塩のことを「足助塩」と言った。

足助の町並みは、平成23年(2011)に、愛知県で初めて国の重要伝統的建造物群保存地区(通称・重伝建)に選定された。歴史ある家屋と自然が融合した美しい景観は、未来へと受け継がれていくことだろう。

足助の二大祭り

(1) 春祭り

春祭りは、前述した足助次郎重範公を称える足助神社の祭礼である。かつては、重範公の命日にちなんで5月3日に行われていたが、近年は、桜が美しい4月の第2土曜、日曜に執り行われている。



若連の梶さばきで運行する花車

足助の中心部にある7つの町(親王町、田町、本町、新町、西町、宮町、松栄町)の花車が町内を曳き回される。どの町の

祭りが今の形になったのは、江戸時代後期頃であると思われる。かつては5日間かけて行われていたが、現在は2日間となり、土曜日を試楽祭、日曜日を本楽祭と呼んでいる。

町内の曳き回しに加えて、試楽祭では神輿渡御が、本楽祭では山車の宮入り、囃子、火縄銃、棒の奉納なども行われる。夕刻には、4台の山車が境内を一周する「曳き回し」のあと「梵天投げ」が行われる。山車から長く伸びた竹竿の先端を飾る白色の「梵天」を各町の若い衆代表である年行事が「祝詞」をあげて本殿の前で投げ、祭りは最高潮を迎える。「梵天」は、家内安全等のお守りとして、地元民や観光客も欲しがり、奪い合いになるほどである。その後、たくさんの提灯に火を灯し、帰り車として各町へ帰っていく。勇壮さと幻想的な光景は、観る



西町の町内曳き回し



提灯に火を灯した帰り車



香嵐溪のライトアップ

者に感動を与えるほどだ。足助の秋祭りは、平成6年に京都で行われた「平安建都1200年全国祇園祭山笠巡行」に招待され、京都の街並みを曳き回し、知名度をあげた。また、平成16年には、愛知万博の市町村フェスティバル「山車百輛総揃え」にも参加している。

足助の観光

足助は豊田市の観光地として四季を通じて多くの観光客で賑わっている。春(3月の中旬頃)には、香嵐溪の飯盛山の斜面にカタクリの花が群生する。カタクリの花は、スプリングエフェメラル(春の妖精)とも言われ、可憐な姿に人気がある。

夏は平成14年から「たんころりん」が町並みを彩る。たんころりんとは、竹かごと和紙で作った円筒形の行灯の

ことである。8月上旬からの約2週間、日没後の町並みを火灯りが照らし、夏の情緒を演出する。秋の香嵐溪は全国屈指の紅葉の名所だ。見頃は11月の下旬だが、昭和63年に始まった263基のナトリウム灯によるライトアップには、11月初旬から多くの観光客が訪れる。

2月には、平成11年から「中馬のおひなさん」のイベントが続く。足助の人々が、女閨や店内に思い出の雛を華やかに飾り、道行く人に町並み散策を楽しんでもらおうと始まった。

ここ1年半は、新型コロナウイルス感染症の影響により、足助祭りや各種イベントの縮小や中止を余儀なくされている。早く穏やかな日常となり、誰もが安心して楽しめる観光地・足助に戻ることが切に願うばかりだ。



中馬のおひなさん in 足助



風情漂う「たんころりん」の夕涼み



川沿いに並ぶ石垣造りの民家



<資料・写真提供：豊田市足助観光協会>

〒444-2424 豊田市足助町宮平34-1

☎：0565-62-1272